

ワイコフのフルベッキ小伝

砂田良和

日本に最初にやってきたプロテスタント宣教師の一人であるオランダ改革派教会のG・F・フルベッキ(1830-98)の伝記としてはW・E・グリフィスが著した“Verbeck of Japan A Citizen of No Country”が有名である。この伝記はフルベッキの死の2年後の1900年(明治33年)にアメリカで出版されたのですが、日本ではそれから一世紀以上もたった2003年(平成15年)に村瀬寿代氏によって『日本のフルベッキ』の題で翻訳されました。

これ以外の伝記類は余り知られていませんが、グリフィスに先立ってフルベッキの小伝が日本では発表されていたのです。筆者はフルベッキのオランダ改革派教会の同僚宣教師のM・N・ワイコフ(1850-1911)で、1894年(明治27年)に英字雑誌(最初は隔月刊)The Japan Evangelist(ジャパン・エヴァンジェリスト)の第2巻第5号に発表されました。翌年の日本語雑誌『太陽』の第7号に戸川残花が「フルベッキ博士とヘボン先生」という小文を載せています。フルベッキとヘボンに加えて聖公会のウィリアムズ監督も紹介されているので、ご存知の方も多いかも知れません。私の知る限り、この小文はフルベッキの生涯を日本語で始めて紹介したのですが、資料としてワイコフの小伝を利用したことが明記されているのです。

フルベッキはその生涯の40年近くを日本で過ごし、日本で亡くなりましたが、ワイコフも合計35年在日した後に、これも日本で亡くなっています。

ワイコフの小伝では、フルベッキがオランダ出身者であること、自国語のオランダ語に加えて英語、ドイツ語、フランス語と4ヶ国語に堪能であったこと、彼の生年はヨーロッパで鉄道がデビューした年であったことと彼は将来の職業として機械工学を選んだこと、アメリカへ渡ってから宣教の道に転進したこと、そしてなぜ彼が日本への派遣宣教師として選ばれたのかを報告しています。長崎に着いてからは日本語の学習に努めたこと、英語の教師としての資質を日本人から認められたこと、更に明治の新政府に乞われて上京して教育を中心に政治や法律を含む諸政策にも助言を求められたことにも触れています。フルベッキは宣教師の守備範囲を超えた形で新日本の出発に関与したのでした。

このようにフルベッキの略歴の基本的枠組みはすべて紹介されているのです。フルベッキの伝記を書くに当たってグリフィスはワイコフの小伝も参考にしたものと推測されます。

『日本のフルベッキ』から更に9年後、ワイコフは再びフルベッキの生涯を振り返る機会を与えられました。1909年(明治42年)の夏に軽井沢で開かれた長老派教会と改革派教会の合同会議の席上、ワイコフはあるペーパーを読んだのです。それが同年のジャパン・エヴァンジェリスト誌の9月号に掲載された、もう一つのフルベッキ小伝なのです。前半の内容は以前のものとよく似ているのですが、後半ではフルベッキの人となりにより焦点を当てているのです。これはグリフィスが書いた伝記を意識して、それを利用すると同時にその足りないところを補うという意気込みが感じられるのです。

そこで語られたフルベッキは「極端に謙虚な人」であり、「気前のよい人」であり、「(家族などに対する)愛情の深い人」であり、「温和な

人」であったということです。これらの特徴を具体的な例を挙げて説明しているのです。

二つの小伝はそれなりの資料的価値があると考えて数年前に翻訳をしておいたものですが、横浜プロテスタント史研究会でフルベッキについて発表しないかの誘いがあったのを機会に全文の拙訳を発表した次第です。発表の直前、明治学院歴史資料館資料集 第6集』の中に辻直人氏が後の方の小伝を「ギドー・F・フルベッキ伝」として出版されたことを知り発表を躊躇しましたが、二つの小伝をまとめて扱うことに何らかの意義があると考えました。

村岡平吉と朝鮮

小野 容 照

村岡平吉 1852 年、武蔵野国橘樹村小机(現在の横浜市港北区)の紺屋に生まれた。開港以来、横浜を中心に活動していたアメリカ長老会宣教師ヘボン一派による小机布教に遭遇したことを契機とし、1883 年に横浜の住吉教会において、アメリカ長老派宣教師ノックスより受洗した。1894 年に指路教会の長老に選任されて以降、指路教会の長老職を務め続けた。

一方、村岡平吉は 1898 年に福音印刷合資会社という印刷所を設立し、指路教会の長老を務める傍ら、聖書をはじめとするキリスト教関係の書籍を印刷しており、「バイブルの村岡さん」と呼ばれていた人物でもある。戦前に発行されていた指路教会の機関誌『指路』の印刷人であり、警醒社の書籍の印刷も受け持っていた。そのため、近代印刷史研究の分野でも、よく知られた人物である。

筆者は、キリスト教史の専門でもなければ、印刷史の専門でもなく、植民地期朝鮮の民族運動史を専門としている。にもかかわらず、なぜ筆者が村岡平吉の研究をしているかといえば、それは 1914 年から 1922 年にかけて、日本で活動する朝鮮人運動家(主に留学生)の朝鮮語出版物の大半を、

村岡平吉の経営する福音印刷合資会社で印刷していたからである。とりわけ、朝鮮が植民地に転落する 1910 年から 1919 年までは、日本は朝鮮で「武断統治」を断行しており、朝鮮に言論の自由はほとんどなかった。ゆえに、朝鮮よりは言論弾圧の緩い日本で、朝鮮人は出版物を発行していた。日本で発行された朝鮮人の朝鮮語出版物は朝鮮にも流入し、重要な役割を果たすのであるが、その大半を村岡平吉が印刷していたのである。村岡平吉は、朝鮮の民族運動に「印刷人」として関わっていたという点で、極めて重要な人物である。

福音印刷合資会社の設立経緯、福音印刷合資会社で発行された朝鮮語出版物、朝鮮人との出会いなどは、すでに 2009 年 10 月発行の『在日朝鮮人史研究』第 39 号に「福音印刷合資会社と在日朝鮮人留学生の出版史(一九一四～一九二二)」という題目で発表してあるので、詳しくはそちらを参照されたい。大まかに概要を述べれば以下の通りである。

村岡平吉は、かつて横浜居留地にあった *L'Écho du Japon*(以下、『レコー・デュ・ジャポン』と表記、意味は「日本の声」)を発行していたフランスの新聞社、レコー・デュ・ジャポン社で職工として勤務したのち、1880 年代中盤に渡り、帰国後に王子製紙の横浜分社で工場監督を務めた。当時、王子製紙は印刷業も営んでおり、一般書籍だけでなく、聖書や讃美歌をはじめとするキリスト教書籍も印刷もしていた。1898 年に独立、指路教会の牧師も務めた宣教師・ルーミスが支配人を務める米国聖書会社のバックアップを受けて、福音印刷合資会社を設立した。当時、ハングルの活字を持つ印刷所はかなり珍しい存在であったが、米国聖書会社が発行する聖書を印刷していた関係で、様々な国の活字を持っていた。当然ながら朝鮮語聖書の印刷もしており、これは朝鮮にも流入していたという。

1910 年以降、朝鮮が植民地化されるとともに、朝鮮留学生が増加した。朝鮮留学生が増加すれば、当然ながら、日本で学んだ学問や思想、文学などを発表したいという欲求も高まる。そうした流れの中で、1914 年に朝鮮留学生は『学之光』とい

う雑誌を発行する。「学之光」は、1910年代の朝鮮語出版物を代表する文献であるが、これが福音印刷合資会社で印刷された最初の朝鮮人による朝鮮語の文献である。以降、福音印刷合資会社は関東大震災で倒壊する1923年まで、計12種類の朝鮮人の雑誌を印刷する。

もちろん、印刷代金はとっていたからビジネスではあるが、福音印刷合資会社はハンゲルの印刷が可能な数少ない印刷所のひとつであり、また印刷のための遣り取りを通して留学生自身も印刷術を学ぶことができた。1919年には、わずか三週間だけではあるが朝鮮人を雇用していた。後、その朝鮮人は廉想渉という筆名で、小説家として名を残すこととなる。

以上のように、村岡平吉や福音印刷合資会社が朝鮮民族運動に「印刷」を通して関わった役割は極めて大きかった。けれども、最後にひとつだけ指摘すべきことがある。それは、自身が文章を残さなかった村岡平吉がどうだったかは不明だが、指路教会が朝鮮の独立を支持していたわけではないということである。指路教会は朝鮮人差別に対しては批判的であったが、1920年5月1日付「指路」第88号の「宣言」では、朝鮮に対して以下のような声明を発表している。「我国人をして正義と人道に拠りて鮮人(戦前における朝鮮人に対する別称—筆者)を指導せしめことを期す」と。

戦前の日本人キリスト者は、キリスト教信仰という植民地人との共通点などもあり、かれらに同情的であり、近い存在であり、そのことが植民地人の民族運動に間接的に果たした役割は評価すべきである。けれども、植村正久をはじめとして植民地主義・同化主義者が多く、被圧迫民族のナショナリズムを理解しようとしたのは、吉野作造などごく一部であった。多くの朝鮮人留学生が通い、交流もあった村岡平吉が長老をしていた指路教会がこのような声明を出したという事実は、帝国期日本のキリスト者の限界を示しているといえよう。

キリスト教の国際性

原 島 正

はじめに

私は、二人の先生に師事した。一人の先生は資料を読み、資料に即して語ることを求め、私の考えには関心を示されない。もう一人の先生は、資料に記されていることについての私の考えを語ることを求められた。二人の先生は決して矛盾したことを求められたのではない。「ものごとは見方によって見え方が違ってくる」のである。同じ資料でも見方によって違う見え方をする。視点を定めることが大切である。そこで、今回はキリスト教についての私の見方をお話する。それは「キリスト教の国際性」ということである。なお、キリスト教だけが国際性を持つのではない。仏教そして神道の国際性ということが当然考えられる。

1. キリスト教の国際性と世界性と地域性(民族性)

最初に言葉の説明をする。国際性とは、それぞれの個性が生かされながら、統合されていること。他方、世界性は、個性が解消されて、画一化され、統一されていることである。

そしてキリスト教は、国家・民族を超える、国際性を持つ。同時にキリスト教は、国家・民族を生かす、地域性を持つ。そしてキリスト教は、地域性を生かしながら、世界の宗教として発展してきた。つまり、キリスト教は、どこまでも一つでありながら、そこには多様性があるのである。

日本基督教公会条例「第二条例(公会基礎)」に次のように記されていたことを想起しよう。

「我輩の公会は宗派に属せず唯主耶穌キリストの名に依て建る所なれば、単に聖書を標準とし、是を信じ、是を勉る者は、皆是キリストの僕、我儕の兄弟なれば、会中の各員全世界の信者を同視して一家の親愛を盡すべし。是故に此会を基督公会と称す。」

大事なことは下線部分の「会中の各員全世界の信者を同視して」であり、日本の信者も全世界

の信者と一つであることが明記されていることである。キリスト者であることは、各々国の民であることを越えて一つなのである。

2. 内村鑑三の基督教観と聖書観

私は長年、内村鑑三の宗教思想研究をしてきた。そこで内村を例に「キリスト教の国際性」について考えてみたい。内村は1901年5月発行の『聖書之研究』に「我が理想の基督教」と題した論考を発表している。そこで内村は「外国宣教師に頼らざる福音的基督教」が理想のキリスト教だと言う。その理由として内村は、「基督教は宇宙的宗教であるから独立的でなければならない」という。ここで内村はキリスト教を「宇宙的宗教」だとする。決してヨーロッパ・アメリカの宗教ではない。さらに、内村は「吾等は仏教徒や儒教徒と与みして宣教師より独立してはならない、吾等の基督教はドコまでも福音的でなくてはならない。儒教的基督教であるとか、仏教的基督教であるとか云ふものは決して基督の基督教ではない。基督教は絶対的宗教である。之は他の宗教と混合して成立するものではない。」

キリスト教は宇宙の宗教であり、福音的でなければならない。同時にキリスト教は日本の宗教でもある。内村は永井直治訳『新契約聖書』に「序言」を書いている。(1928年4月)。そこで次のように主張する。「聖書は神の書である、故に世界の書であり人類の書である、それ故に亦日本人の書である。真理は普遍的なると同時に個別である。世界の書なるが故に我書なりと称し得る書のみが神の書であり又真理の書である。」さらに英文「日本的基督教」1920年12月では次のように述べる。「日本的基督教と称ふは日本に特別な基督教ではない、日本的基督教とは日本人が外国の仲人を経ずして直に神より受けたる基督教である。」「日本魂が全能者の氣息に触れる所に日本的基督教がある、此基督教は自由である、独立である、獨創的である、生産的である、眞の基督教は凡て斯くあらねばならない、・・・日本の基督教のみ能く日本と日本人とを救ふ事が出来る。」

こうした「日本的キリスト教」には、危うさが

伴っていた。矢内原忠雄は、「内村鑑三と日本」と題した1961年4月8日の名古屋での講演（『内村鑑三とともに』東京大学出版会、所収）で、内村の「日本的キリスト教」は「外国宣教師から誤解されただけでなく、日本人の間にも濫用される危険がありました。」そして、戦争中の「日本的キリスト教」とは同名異質のものでありまして、内村はそんな傾向を彼の日本的キリスト教の中には露一つももっていない」と述べている。けれども、内村に「日本」への愛着が強すぎると面がなかったかどうか、今後の研究課題である。

3. 今井三郎「日本人の基督教」

次に、今井三郎『日本人の基督教』第一公論社(1940)を取り上げる。今井は、日本メソヂスト教会の牧師であり、青山学院で教えた。『日本キリスト教歴史大事典』(教文館)によれば、今井は「日・中・米関係の悪化を憂慮し、自ら渡米して各方面に接触し、世論の是正に努力。雄弁な説教者として定評があった」とのことである。(松田重夫執筆)

今井は、日本にプロテスタント・キリスト教が移入されてから70年の歩みを三期に区分する。第一期は、西洋思想をひたすらヘレニズムもヘブライズムも峻別されることなく、無批判に取り入れた、模倣宗教の時期。第二期は、両者の分離がなされキリスト教思想が純粋な形で把握された、批判宗教の時期。第三期は、キリスト教が日本の地盤より成長すべき、創造宗教の時期であり、「基督教が日本化の時代」とであるとする。今がその時期である。そして「日本民族の魂の内奥に触れ、又精神生活の深みより説き出される基督教のみが将来の輝かしき発展を予約せられて居る」というのである。キリスト教の民族性が、強調される。他方、今井は、「自己の日本民族の独自性、特異性を主張するのではなく、他民族の中に発達した文化を同化融合して行く国際協調の一面」も大事であり、「日本精神の裡には世界的和協を要望する普遍的精神がある。此の方面は今日迄比較的発展し居らぬ様に見えるのである。」と述べるように、日本民族の国際性にも期待をしている。けれども、主たる期待は日本精神にあり、キリス

ト教そのものの国際性への言及がなされない。「雄弁な説教者」であった牧師今井が、聖書ではなく、日本精神を専ら高揚するに至ったのは何故なのか。原誠氏の著作のタイトル『国家を超えられなかった教会』（日本キリスト教団出版局 2005）の問題は、未解決である。

おわりに

最後に、宣教師の問題について考えてみたい。宣教師たちには、キリスト教の世界性の認識はあっても、国際性の認識は欠如していたのではない。新渡戸稲造が 1900 年に英文で出版した“BUSHIDO”は、読者として宣教師を考えていたのではない。日本文化を知らないで伝道をしてはだめである、そのことを本書で主張しなかったのではない。「我が国におけるキリスト教伝道事業失敗の一原因は、宣教師の大半が我が国の歴史について全然無知なることである。」（矢内原忠雄訳、岩波文庫 139 頁）

キリスト教の世界性には、内への深まりがない。地域性には、外への広がりがない。求められることは、内への深まりが外に広がること、つまり「内の内は外」ということであり、「外が内に深まる」ことではないか。「地域を超越するキリスト教」と「地域に内在するキリスト教」が統合されるところにキリスト教の国際性がある。それが結論である。

「村岡花子の生涯と『赤毛のアン』に読み取るメソジストの足跡」

村岡 恵理

村岡花子（1893～1967）は 75 年の生涯に多くの英米家庭文学の翻訳を手がけ、婦人参政権獲得運動、教育や家庭の在り方などの社会改革に関わった。この生涯を決定づけたのは、母校東洋英和女学校で、カナダ・メソジスト派婦人宣教師から受けた教育である。その意味では 1952 年の翻訳出版以来、今なお読み継がれる『赤毛のアン』は、村岡花子をフィルターとした日本におけるプ

ロテスタント伝道の成果のひとつとも言えるのではないか。

村岡花子とプロテスタントとの関わりは、カナダ・メソジスト派の日本伝道史に即している。静岡の貧しい茶商人であった花子の父は、青年期にこの派に傾倒し、やがて甲府に移り、花子が生れる。甲府もカナダ・メソジスト派の主要な拠点であり、花子は 2 歳で幼児洗礼を授かった。上京後、10 歳で富裕層の令嬢が多く通う東洋英和女学校に編入が許されたのも、父親と学校創設者たちとの信仰上の繋がりに起因する。静岡や甲府において、カナダ・メソジスト派がもたらしたキリスト教や近代的な学問が、アウトサイダーとなった旧徳川家幕臣たちの精神の拠り所となり、また、再起の導きとなったことは、太田愛人氏の『明治キリスト教の流域 静岡バンドと幕臣たち』に明らかであるが、その感化が支流に至っては、花子の父のような一介の茶商人にも深く及んだという実例であろう。花子が在学した 1903 年から 1913 年は、ミッション・スクールにとって逆風の時代であり、「私立学校令」「訓令一二号」の発布など、政府からの弾圧があったが、校長ミス・ブラックモアは、時勢に屈することなく、より強固な基督教教育、英語教育を徹底した。また、奇しくもミス・ブラックモアをはじめ、宣教師たちが、『赤毛のアン』の原作者モンゴメリと同世代のカナダ人であり、主人公アンとまさに同じ文化に包まれて過ごした青春の日々は、約 30 年後のこの原作との出会いを運命的なものとするのである。

山梨英和女学校の教師時代に、自身の文学の方向性として「家庭文学」を示す。家庭文学を保守的な文学としてではなく、個人の精神の浄化と、健全で清新な社会をつくる第一歩とする文学観に、メソジスト派の特徴ともいえるべき、出版事業を伝道の主要な方法とする姿勢の影響がうかがわれる。1919 年、各派宣教師共同出資による出版社、基督教興文協会（震災後、教文館）に入り、仕事を通じてキリスト教事業主の村岡徹三（指路教会長老、福音印刷会社社長村岡平吉の後継者）と結婚。その後、関東大震災による夫の事業の倒産、愛児

の病死という相次ぐ苦難に襲われるが、これは、むしろ花子をしてひとつの信仰の境地に至らしめ、日本中の子どもたちへ捧げる家庭文学の道を天職とさせた。

1939年、国際情勢の悪化により帰国を急ぐ同僚のカナダ人宣教師（聖公会）、L・L・ショーから『赤毛のアン』の原書を手渡される。35年間の在日期间中、女子教育、児童書の出版に従事していたショーは、西洋文学の研究者には聖書の知識が不可欠という持論を展開しており、祖国の物語の紹介者として花子に託したのである。戦況が悪化する中、花子はカナダ人の恩師や友人に、友情の証を立てる思いで密かに翻訳をすすめた。母校の思い出に繋がるこの1冊を賜ったことによって、訳者自身が戦禍を行き抜く一筋の光を見出したと言っている。原作者モンゴメリは、両親の愛情に恵まれず、厳格な長老派信者の祖父母に育てられた幼少期を投影した『赤毛のアン』について、「これは書くことの愛から生れた仕事でした。『道徳』や『日曜学校』の理想は捨て去り、アンを生身の女の子にしました。この物語には、私の子ども時代の思い出や憧れが盛り込まれています」と述べているが、この物語の根底には、おのずとキリスト教的なヒューマニズムが滲えられ、主人公アンは「隣人愛」を実践する「光の子」として描かれている。宣教師団の献身にも関わらず、数字の上では日本にキリスト教が根付いたとは言いがたい。しかし、『赤毛のアン』は全く教訓的ではなく、日本に「隣人愛」を伝えることに成功している。今なお、アンがヒューマニズムの真髄として、多くの読者に希望を与え続けていることを思うと、村岡花子にとってこの訳業は、言わばミッションだったのかもしれない。少なくとも日本における『赤毛のアン』誕生の影には、多くの宣教師たちの情熱と献身があった。

アン・シリーズ全10巻には、約100年前カナダの人々の教会を中心とした日常生活が描かれている。人気作家となったモンゴメリは、同時に長老派牧師夫人でもあり、第6巻『アンの夢の家』では、日本に渡る宣教師も登場し、信者間の他愛のない派閥も垣間見える。プロテスタント史

上、若いメソジスト派は当時のカナダにおいても新興勢力として先住民やフランス系移民など、虐げられた貧しい人々への伝道を本分とした。そのため、主流である一部の長老派婦人からの偏見も免れず、そのやりとりの中にメソジスト派の特性も読み取ることができる。

金沢から見た宣教150年

辻 直人

はじめに

2009年はヘボンやS.R.ブラウンらによる日本宣教開始150年目にあたるが、石川県金沢市にとっては宣教130年目だった。と言うのも、1979年に米国長老教会宣教師T.C.ウィンによって金沢伝道が開始されたからである。ウィンはS.R.ブラウンの甥にあたり、同じ米国長老教会による伝道地であることから、金沢と明治学院には実は深い関係がある。

1. 明治学院と金沢（1）

『明治学院百年史』113頁でも指摘されているように、明治学院の前身の1つである東京一致英和学校には2つの予備校が存在した。「東京一致英和学校規則」（1884年）によれば1つは「神田淡路町」に、もう1つは「石川県下加州金沢高岡町」に設置されていた。前者は「英和予備校」として知られているが、後者は『明治学院百年史』では「幻の学校」とされている。

金沢でこれに当たる学校と考えられるのは、1883年認可された「愛真学校」である。この愛真学校が東京一致英和学校予備校だったことを裏付ける史料はない。当時愛真学校は高岡町ではなく近接する南町にあり、この点も『規則』の記述と合致しない。しかしウィンの書簡から、愛真学校と明治学院の深い関係を伺うことができる。1885年に「北陸英和学校」と改称された愛真学校はウィンらの尽力で運営されていたが、1892年3月5日付ウィン書簡には以下のように書かれている。

「金沢ボーイズ・スクールを卒業して、現在明治学院に在学している者が三名おります。今年のクラスの中には神学生として明治学院に進学する予定の者、つまり一年以上普通教育を受けてから神学校に入学する者ですが、四、五名含まれて降ります」「計画の中の制度改革については、履修過程を一年短縮し、わが校の学生を従来よりも早く明治学院に送ろうというものです」（鈴木進訳『北陸学院短期大学紀要』第18～20号、1986～89年）

北陸英和学校は明治学院への進学を推進していた。しかし同校は1899年、いわゆる文部省訓令第十二号問題で廃校した。

2. トマス・C・ウインの宣教活動

ウインが叔父ブラウンから受けた影響は大きかった。このことについては拙訳『明治学院歴史資料館資料集』第6集を参照されたい。1877年来日したウインは、1879年10月、「金沢が大藩の城下であるにもかかわらず、文化の程度がやや遅れ、しかも仏教の勢力が頗る熾烈であるときき、このような地方こそ己が生涯を献ぐべきところであると考へ」（中沢正七編『日本の使徒 トマス・ウイン伝』31頁）、M.ツルーと共に夫妻で横浜より金沢へ入った。最初の仕事は金沢中学師範学校の英語教師だったが、本格的な宣教活動に入ると、1881年に金沢教会（現日本基督教団金沢教会）を設立し、前述した愛真学校での男子教育にも深く関与した。1931年金沢で礼拝中に倒れ召天した。

3. 女性宣教師の活躍

金沢の宣教教育活動の礎を築いた2人の女性宣教師がいる。1人はフランシナ・ポーターである。フランシナは1882年、先に金沢でウインを助けていた兄ジェームス宣教師を頼りに金沢へ入り、1886年に英和小学校と英和幼稚園を開設した。小学校は文部省訓令第十二号の影響で1899年に廃校となるが、英和幼稚園は現在も北陸学院第一幼稚園となって、日本に現存する最古の私立幼稚園として存続している。また小学校も1961年に北陸学院小学校として再興された。

もう1人はメリー・ヘッセルである。1882年

大阪に来日したヘッセルはウインに誘われ翌年金沢で私塾を開始、1885年には正式に金沢女学校を開校した。これが後に北陸女学校、北陸学院と改称され発展を続けている。

4. 明治学院と金沢（2）

改めて明治学院と金沢の関係を見ておく。金沢教会初代牧師で金沢女学校第2代校長も務めた青木伸英は東京一致神学校卒業生である。戸田忠厚は1874年に横浜海岸教会で日本人初の接手礼を受け1887年金沢殿町教会へ赴任、1899年からは金沢女学校第3代校長も務めた。金沢女学校第4代校長で後年明治学院中学部長も務めた水芦幾次郎まで、金沢女学校2～4代目校長は明治学院出身者だった。

この他にも、明治学院高等学部長を務めた中山昌樹は愛真学校出身である。北陸女学校第10代校長の中沢正七も明治学院普通学部や神学部で学んだ経験を持つ。金沢教会創設メンバーの1人である加藤覚も、明治学院神学部に進学した。おわりに

150年前にヘボンやブラウンから始まった宣教活動は日本各地に福音の種を蒔いていったが、金沢はその収穫の1つであり、横浜から比べて20年の遅れはあるものの、明治学院と深い関わりを持ちながら宣教教育活動が繰り返されていったのである。明治学院歴史資料館講演会（2009年11月7日開催）

大藤 啓矩 さんを偲ぶ

花 島 光 男

横浜YMCAの主事であった大藤啓矩氏が亡くなってから1年たつ。大藤氏は横浜プロテスタント史研究会の創設の隠れた恩人であったことを記録に残しておきたい。

1979年10月、ヘボン来日120年を記念して、横浜市広報センターは、ヨコハマ市民グラフ31号を『ヘボンと横浜』特集号として発行した。この編集には高谷道男氏、小林功芳氏、花島が委員として加わり、発行口より前にバンドホテ

ルで開催されたヘボン来日120年記念会で配布されると、横浜市内のキリスト教学校、教会等で歓迎された。発行当初より「ヘボンと横浜」特集号は希望者多く入手困難であった。広報センター担当者は、需要が多く品不足の状態であることにより、この特集号の希少価値が生じる、として増刷することは全く考えていなかった。我々執筆者への割当てもほとんどなく、周囲からの希望にも応じることができなかった。

ところが1980年4月12日、突然執筆者たちが横浜 YMCA に呼び集められた。そして当時 YMCA 主事であった大藤氏より、市民グラフの二刷が執筆者の同意を得ることを条件に、出版できることになったと説明を受けた。だれかが横浜市のごくかかと交渉したのと思われるが、どこで、どのような交渉があったのかは知らされなかった。大藤氏がこのことに大きく関与したことは想像される。我々執筆者には異議不満はなく、カステラ一本のお土産に喜んで同意した。市民グラフとして二刷は全く異例のことで、広報センター担当者には不本意であったと想像した。

この時、執筆者たちから、また時々集まり研究と情報の交換をしたいとの声が生じ、この日に大藤氏に呼び集められたことが、研究会発足の契機となった。

大藤氏は YMCA 退職後にはもっぱら山手の外人墓地に関わり、当時の管理人であった安藤氏と共に墓地の整備、調査、保存管理、知識の普及、正門脇の資料館の建設など、全てを墓地のために奔走し捧げつくした。しかし突然に墓地との関わりを終えた。その真相を聞きたかった。2009年4月21日、病気で天に召された。その墓は外人墓地にはない。

大儀見 薫さんを偲ぶ

大儀見さんは、横浜プロテスタント史研究会発足当時からの会員である。1994年に『大儀見元一郎とその時代』（374頁）と言う本を太田愛人、秋山繁雄氏などの共著で出版している。これによると、薫さんが5歳の頃、90歳のお祖父さ

んが机に向かっている姿を覚えているという。

1870年12月木村熊二と渡米、ホープ・カレッジ予科に入り、72年6月に洗礼を受け、ホープカレッジ卒業後、ニューブランズウィック神学校を卒業、牧師の資格を持って82年11月帰国、日本最初のプロテスタント牧師になった。

薫さんはリーダーズ・ダイジェストの編集や西武百貨店の取締役等を歴任、この研究会では、1986年4月（第52回）の例会において、「大儀見元一郎の資料」という題で発表し、その後も、度々研究会に出席し、研究会を見守って下さった。今年の2月27日付「朝日新聞」夕刊に、ヨットマン大儀見薫さんという写真入の記事で、2009年9月18日死去（肺血栓塞栓症）80歳と書かれていた。1987年大阪からメルボルンまでの1万2百キロの太平洋縦断2人乗りヨットレースを計画、何と優勝をしてしまったという。「地球は海の星」と言う意味合いの帆船「海星」の帆船訓練を通じて人間教育に励んでいた。天国で休まれておられる薫さんの上に主にある平安と、妻・菊子さんのご家族、遺族の上に、主の慰めが豊かにありますように祈る次第である。（岡部一興）

研究発表リスト（その33）

- 第299回 2009.1.17 齋藤元子
『『よろこばしきおとづれ』—地理教育からみた明治初期のキリスト教児童雑誌—』
- 第300回 2009.2.21 津田一路
『横須賀学院の創立とその後』
- 第301回 2009.3.21 三羽善次
『和戸教会創立前後』
- 第302回 2009.4.18 砂田良和
『ワイコフのフルベッキ小伝』
- 第303回 2009.5.16 小宮まゆみ
『敵国人抑留—戦時下の外国人民間人』
- 第304回 2009.6.20 小野容照
『村岡平吉と朝鮮』
- 第305回 2009.7.18 原島正
『キリスト教の国際性』
- 〈編集後記〉会報46号をお届けします。皆様のご健康とご活躍をお祈りしています。（K.O.）